

エルピザの里(千葉市緑区)



利用者の生涯の家になるように

千葉市緑区にある知的障害者支援施設「エルピザの里」(建築主「清輝会」)が、2022年度の千葉県建築文化賞で一般建築物の部最優秀賞を獲得した。利用者にとって生涯の家となるような施設にした。地域社会との交流拠点にもする。設計・監理を手掛けたゼロ・アーキテクトゥプラスコンサルテイングの松本秀樹代表取締役は「常識とされてきたものを壊しながら設計に向き合ってきた」と振り返る。

所在地は高田町149の2(敷地面積9291平方メートル)。建物はW一部RC造平屋一部2階建て延べ3116平方メートルの規模。施工は輝建設が担当し、老朽化した既存施設を現在地で建て替えた。第1期工事は2019年3月〜20年8月、第2期工事を同9月〜21年12月に行った。

施設は入所者6人と通所者20人が利用する。建て替え前は、全員が同じ空間で集団生活をしてきた。利用者同士でけんかが始まると、全員が精神的に高揚するといった感情の連鎖が起きやすい状況だった。利用者が一人になれる場所が少なく、自由



▲縁側は回廊になっている

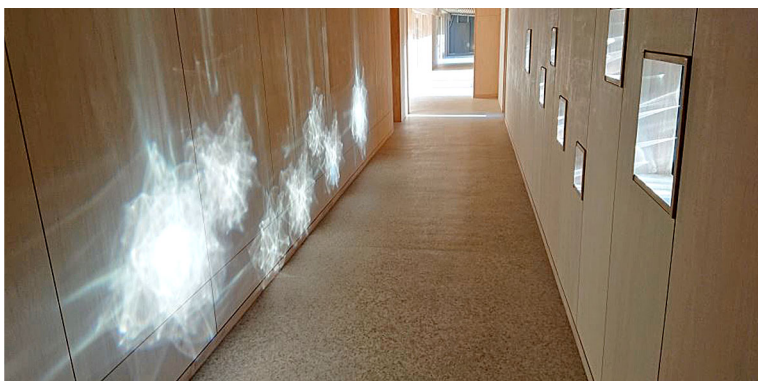
建物正面には大きな庇を設けた▶

な活動がしにくかった。ものを壊そうとする利用者もいることから、頑丈で安全なコンクリートで造られており、冷たく閉ざされた印象があった。建て替え工事開始前の2年間、清輝会と設計者は建物について話し合った。清輝会が求めたのは利用者の生活環境の改善と生活の質の向上。ただ、利用者がカーテンを剥がしたりガラスを割ったりする可能性があるから、安全性の問題などから必要



以上の設備導入に踏み切れなかった。

松本氏は「利用者がものを壊すといった行為をとるのは、精神的なストレスがあるからではないか」と考えた。利用者目線で過ごしやすく心地良い環境を



太陽の光が散乱し、時間によって表情が変わる

設計はゼロ・アーキテクトゥプラスコンサルテイング

開放的で心地良く 地域とのつながりも

整える必要があると指摘。開放的な空間や開口部をガラス張りにすることを提案した。従来の知的障害者施設では考えられないことだった。さらなる知見を求めて、話し合いに参加したメンバーらは全国各地の障害者施設も見て回った。清輝会の小島裕次氏は「カーテンの代わりに木製の雨戸のような建具を付けている施設もあった。新たな発見があり、考えを変えたところもある」と当時の心境を話す。現場の管理・運用面も考慮した上でデザインを詰めた。



21年12月、新施設は無事竣工を迎えた。優しく温かみのある木造がメイン。建物正面に設けた大きな木組みの大庇(ひさし)が、利用者だけでなく地域住民も迎える。大庇の下部にある大扉を開くと、地域社会とのつながりを生み出す交流ホールがある。ホール反対側にも大扉があり、縁側廊下と中庭へつながる。利用者は少人数のグループに分かれて居室やリビングダイニング、浴室などを整備した「ユニット」内で暮らす。通所者用1ユニットと入所者用5ユニットの計6ユニットを中庭を囲う

ように配置。縁側廊下が各ユニットをつなぐ。縁側廊下はガラス張りの大きな開口部を設けており、利用者は中庭に自由に入りできる。各ユニットは天井を高くし、開放的な空間とした一方で、縁側廊下は天井高さを低めに設定した。場所によって開口部の大きさや通路幅を変え、暗い場所や明るい場所など、さまざまな表情を持つ空間をつくった。利用者は好みの場所を見つけ、思い思いに過ごすことができる。日常の中で木の温かみを感じてもらいたいという思いを込め、手で触れる部分は天然の木材を採用した。光環境にも配慮。サーカディアンリズム(体内時計のリズム)に合わせて、自動的に明るさや色温度が変わる仕組みになっている。

小島氏は「利用者がくつろいでいる時間が長くなった」と変化を説明する。建て替え直後こそガラスをたたく行為があったが、今は見られないという。「地域との関わりを広げたい」と展覧する。

玄関からホールにつながる廊下の一部は白い壁になっている。「壁をキャンバス代わりに利用者に絵を描いてもらいたい」と語る松本氏。施設のこれからは温かく見守っている。(写真はすべて清輝会提供)

